

持続可能なアフリカゾウ獣害対策 に向けた住民組織化の促進

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)
岩井雪乃・公認プロジェクト「エココミュニティ・タンザニア」
Serengeti Development, Research and Environmental
Conservation Centre (SEDEREC)
特定非営利活動法人アフリック・アフリカ



研究

1. 背景と目的

近年アフリカの各地で、ゾウによる農作物被害が深刻化し、地域住民の生活を脅かしている。その一方で、アフリカ各国政府や国際社会は、観光のスター動物であり、ワシントン条約による保護動物であるゾウを保護したい。そのため、さまざまなゾウ被害対策が、政府・国際NGO・観光企業などによって実施されている。

しかし、対策を導入しても、効果的に活用されない事例がしばしば報告されている。住民はなぜ対策を継続する／停止するのか？その要因を明らかにするのが本研究の目的である。

タンザニア・セレンゲティ国立公園に隣接するセレンゲティ県の4村で実施された対策を比較検討した。

2. 結果

調査の結果、6つの対策が実施されており、停止(①)、継続(②③④)、拒絶(⑤⑥)の3パターンがあった。

表1 住民視点からのゾウ被害対策の比較

対策	費用負担	労力・時間負担	追払い効果	付加価値	ドナー組織	継続性
① 唐辛子ロープ	○小	△中	△	なし	政府・国際NGO	停止
② パトロールカー	×多	×大	○	○救急車	早大	継続
③ 養蜂箱	○小	△中	△	○蜂蜜	早大	継続
④ 懐中電灯	○小	○小	○	○日常でも使用	早大	継続
⑤ 見張りタワー	○小	△中	未実施	×狩猟も監視される	政府	拒絶
⑥ 電気柵(案)	×多	×大	○ケニア	×人・家畜・野生動物の移動を妨げる	政府・観光企業	拒絶

⑤見張りタワーとは、セレンゲティ県政府が導入した高さ30mの見張り台。密猟となっても村人は狩猟を続けている。それを監視されるの恐れて使われていない。→

⑥電気柵は、ケニアでは導入されている保護区が多い。セレンゲティ県の村人は土地を奪われるのを恐れて建設を拒否。写真はケニアにて。↓



3. 考察

対策の継続／停止に働いた要因は、4点にまとめられた。

表2 対策の継続／停止に働いた要因

継続する要因	関連した対策
1. 費用・労力・時間よりも追払い効果が高い	停止①唐辛子ロープ
2. 追払い効果に加えて付加価値がある	継続②パトロールカー ③養蜂箱 ④懐中電灯
3. 他の生業(牧畜・狩猟・薪・水)を妨げない	拒絶⑤見張りタワー ⑥電気柵
4. 導入機関との信頼関係がある	拒絶⑤見張りタワー ⑥電気柵

4. まとめ

抽出された要因からは、住民が、短期的な経済合理性ではなく、複合的な生業を支える長期的な視点から対策を選択していることが明らかになった。また、ドナー組織との信頼関係が大きな影響を及ぼすことも確認された。

今後は、日本の事例との比較検討も行いながら、本事例の特徴を分析していきたい。また、外部組織が獣害対策を支援する場合、どのようにすれば住民に受容されるのかをモデル化していく。

活動

1. 目的

セレンゲティ県におけるゾウ被害を軽減するために、3つの対策を実施する。ただし、単に対策を導入するだけではなく、対策実施の基盤となる住民組織を強化する活動も同時に進める。それによって、住民が主体的に対策を継続していくことができるだろう。

2. 内容

1) 住民組織の強化のための研修会

昨年度までは、村外の専門家を招いて指導してもらっていたが、今年度からは、すでに対策を導入している農家が講師となって、これから導入しようとしている農家を指導する形式をとっている

2) ゾウ被害対策

- A) 養蜂箱を設置し、畑の周辺でハチを飼って、ハチで追い払う
- B) ワイヤーフエンス
- C) 懐中電灯を使って、グループで追い払い



ワイヤーフエンスは、養蜂箱フェンスよりも安いコストでより広域の畑を守れる

すでにワイヤーフエンスを張った畑で研修会。先行した農民が指導者。

3. 活動の成果

今年度はワイヤーフエンスを積極的に設置し、守られる畑の面積が飛躍的に拡大した。懐中電灯を使った追い払いをおこなう住民組織も、研修会の効果により増加している。

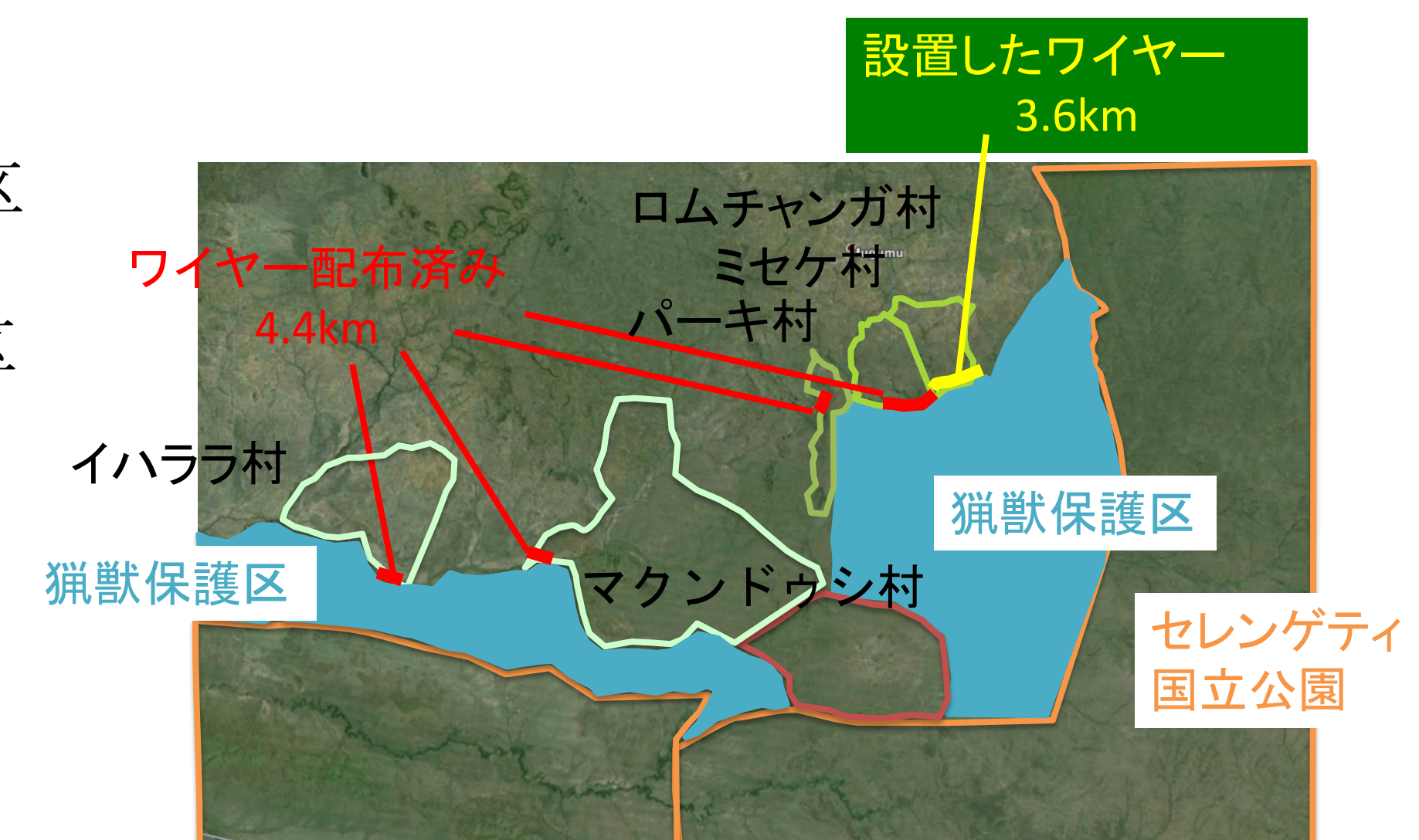
表3 2014年度の実績と来年度の計画

	昨年度実績 2013年	今年度実績 2014年	来年度計画 2015年
ワイヤーフエンス設置距離	0	8km	18km
守られる畑の面積	1ha	16ha	66ha
住民組織数	5	13	30

図 ワイヤーの設置場所 →

ワイヤーフエンスは、村と保護区の境界線に沿って設置している。セレンゲティ県内で動物保護区に接している村は20村以上あり、接している境界の総延長距離は300kmにおよぶ。

今年度は8kmにワイヤーフエンスを設置した。



4. 今後の展望

来年度も、引き続きワイヤーフエンスを拡張していく計画である。ただし、ワイヤーフエンスの効果は何年続くかは予断を許さない。獣害対策の先行研究では、動物たちは数年後には対策に慣れて、破る方法を編み出してしまうことが報告されている。動物との知恵比べを続ける覚悟が必要であるが、現地の農民たちは、必ずしもそれを理解しているとは限らない。説明と対話をもちながら進めたい。